



春燈

2016
November

11 月号

主宰の句

安立公彦

両断の西瓜の朱^ケのうつくしや

盆波を目路一望に九十九里

棚経の僧のうしろに父母の影

身の裡の老いは未だし敬老日

旅人のごとく残暑のバスに坐す



久保田万太郎の句

原宿と越すさき聞きぬ秋隣

『流寓抄以後』昭和三十七年

この句、前書に花柳章太郎転居とある。私が原宿に住んで半世紀だが章太郎家があつた事を初めて知つた。脚本演出家であり俳句の師でもあつた万太郎先生が、まだその頃は閑静な表参道の榎並木を秋風を感じつつ、章太郎の原宿への転居を案じたのであろう。今迄遠い存在だつた万太郎先生のお姿が急に近く懐かしささえ覚えた。たつた二文字の原宿という地名のお蔭で…。

赤羽陽子

久保田万太郎の句

十三夜孤りの月の澄みにけり

「春燈」昭和三十八年

「十三夜」は陰曆九月十三日の夜。その夜の月は「後の月」と呼ばれ、中秋の名月に比べ物悲しいひびきがある。私が子供の頃は祖父母、両親ともに仲よく月見の行事を行っていた。夕方になると尾花や女郎花を飾り、畑で収穫した野菜や団子を月に供え、家族の健康を祈り感謝したものだ。今は私ひとり澄みわたる空の月を仰ぎ、家族の幸せを祈る夜なのです。

都丸美陽子

燈下集



○ 宮沢治子

羽抜鷄鏡の前を素通りす

草の花うす紅色のさ揺れかな

金魚亡き鉢にまた目をゆかせけり

鱗雲ピエロは涙かくしけり

水澄むや青き地球の安らかに

○ 府川昭子

送火のしばらく土を染めにけり

咲満ちて妖しきまでの百日紅

この地球疲れ初めしか花臭木

この夏を総攬ひする夜の雨

秋茄子を刻みて偲ぶ母のこと

○ 永島雅子

せせらぎの川の辺や秋立ちぬ

夢並ぶ子等の手形や星祭(仙台七夕祭)

南部の風運ぶや苞の秋風鈴

子ら帰る夕べの鐘や白粉花

別鴉や今にして知る親心

○ 片山博介

墓洗へば翠黛の影映りけり

みづうみの素風に晒す琴の糸

陶枕や唐子の声の遠くより

ふる里の床下いまも螻蛄の声

空襲を耐へし玻璃戸や盆の月

新涼や軒端雀の羽繕ひ

にこにこと唯頷くや生身魂

朝顔の登り詰めたる廃校舎

頬染めて恋のだんまり吾亦紅

本売れぬ世の中秋の灯かな

○ 鈴木撫足

芭蕉布の風も光も通しけり

カタカナの父の葉書や終戦日

はじめての花火を持つ子無口にて

鬼やんま群れずおもねず風の中

旅僧の小さき木魚や雁渡る

○ 松山三千江

一泊の留守を預かるきりぎりす

お土産のちりめん山椒開けて秋

通り雨残る暑さを掻き回す

狛犬の顔おだやかに処暑の宮

胸元のケチャップの染み休暇果つ

○ 矢口笑子

雨脚の遠のき確と葉鶏頭

遮断機のあがり鉄路の秋日濃し

新しき戒名増えし墓洗ふ

暮れてゆく遠山染めて秋茜

草に寝て仰げば近き銀河かな

○ 赤羽陽子

○ 都丸美陽子

野の風の変はりやすきや吾亦紅

秋澄むや身うち透きゆく水の音

蔓引けば生きざま問はる烏瓜

向かひ居て言葉すくなく柿を剝く

測るたびちがふ血圧小鳥来る

○ 篠原幸子

万年筆のかるきすべりや夜の秋

桃重し父のことばの今更に

戦没者墓苑色なき風のわたりけり

あらためて不戦を思ふ処暑の杜

若人の育ちて五輪竹の春

○ 藤原若菜

新秋のすめらみことのご意志かな

身のうちの虎をバターに台風裡

新涼の跳躍、回転、着地かな

好敵手を称ふる選手涼新た

流星や宙に見えざる暇あらむ

○ 大文字孝一

自分史に残る今年の夏果つる

埋め置く記憶の欠片処暑の浜

古戦場の空に群れ飛ぶ蜻蛉かな

生来の負けず嫌ひや鬼やんま

複眼に死角ありけり鬼やんま

○ 和田絢子

米国の長が鶴折る広島忌

コーヒーの確かな苦さ夏果つる

白桃する指輪ぎらひの指ぬらし

今年米年貢のごとく届けらる

針山の針に立秋の翳整す

○ 神田恵琳

寅さんの無骨を恋ふや葛の花

園丁は色変へぬ松かがやかす

文字やさし秋桜子句碑秋の蝶

深川や江戸の月夜の芭蕉庵

残生のシナリオ描けず秋の虹

○ 小山繁子

子離れの乳房に西瓜抱きにけり

落雁をこつと割りたる夜の秋

秋立つや駅舎の前の水たまり

路地裏に声がこゑ追ふ秋没日

たそがれの芙蓉は花をたたみけり

○ 小島昭夫

夏はるか軍歌断る回天残兵

原爆忌せつせつ歌ふ「許すまじ」

白菊を名無き御霊へ一会とす

吾が挙措の父似に気づく今朝の秋

疎開児の母逝きし日の素風かな

当月集

安立 公彦選



○ 齋藤晴夫

この星の命の不思議魂送り

名草の葉末灼け散るほどの暑さかな

文弱の硯の重さ洗ひけり

牽牛花空の藍より濃かりけり

潮さびの島歌を聞く夏の果

○ 荒井ハルエ

掃寄するものに揚羽の瑠璃の翅

水貝や波いや高き日本海

みちのくの日暮は早し鳥威

胸濡らし母抱くかに墓洗ふ

手つかずや母の簞笥の秋袷

○ 永井恵子

東山魁夷の白馬秋涼し

流星や遠く聞こゆる救急車

八朔の笹に盛りある青果かな

はつかにも紅を揺らしぬ萩の径

硝子屋の奥まで見ゆる秋没日

○ 坂入妙香

富士見ゆる二階の窓や処暑の空

粒胡椒たつぷり下ろす秋初

鬼やんま渋谷の坂を越えにけり

ベランダに蜻蛉群れ飛ぶ日曜日

秋暑しハーブを利かすスバゲッティ

○ 横山さくら

老猫の寝場所を移す秋の昼

庭前の葉擦れの音や秋の雨

秋の蟬昨日を今日につなぎけり

新涼や小指の先の深き紅

目を細め近づく友や秋うらら

春燈の句

安立 公彦選



山の端に今日を鎮むる夏の月

埼玉 茂木 なつ

魂迎へ若きが入りて盛りあがる

飛魚の飛沫や五輪の幕上がる

秋の虹大きな希望標しけり

秋日和母の遺影にある笑顔

黙禱の一際高き法師蟬

福島 室井津与主

鱚雲黒板に書く先師の句

八十路未だ生き甲斐ありで秋麗

睦まじきめをと庭師や涼新た

稲妻の恵みあまねし村十戸

点滴の音なきりズム遠稲妻

放心にをりひぐらしの谷暮るる

秋立つや廊つややかに禪の寺

亡き夫の囁きかとも虫の声

涼新た墨堤に馬つながれて

東京 吉田とよ子

ハンモック天と地と人ゆられけり

新涼の町ゆく人の軽やかに

ローカル線緩りと走る花野中

鶏頭の色鮮やかに長屋門

独り居に九月の風のやさしさよ

子のおもひ親の思ひやいすか鳴く

点滴の一滴ごとに虫すだく

百の窓に百の暮しや秋ともし

蓮ひらく音聞くも人間かぬもや

校庭の空を自在の蜻蛉かな

乳飲み子のふと泣き止みし処暑の風

しつかりと富士に真向かふ案山子かな

夕暮の空にとけこむ酔芙蓉

菊膾毀誉褒貶もなく老いて

稲の花強くやさしき少年たれ

埼玉 滝澤 千枝

東京 佐藤まさ子

神奈川 河本由紀子

千葉 大湊 栄子

余言

安立公彦

亡き夫の知らぬ歲月秋簾

西川 保子

巷間、一〇年一昔と言う。辞書を見ると、もとは一七、二二、三三年前などを意味したこともあった、とした上で普通、一〇年前を一昔と言う、とある。一〇年が長いか短いかは人により対象により異なることは言う迄もない。

作者の夫君のご逝去は何時か知らないが、「知らぬ歲月」を一昔などという俗説で括ることは出来ない。そこには作者のみの緊密なそして豊饒な時間があったのだ。今、秋簾の窓辺で亡き夫を偲ぶ作者、「知らぬ歲月」には夫恋いの思いが重なる。それは一昔とは次元の異なる作者のみの時間である。「秋簾」がよく背景を成している。

夏の夜や連合ひといふ汝と我

山内 四郎

「連合ひ」は配偶者を指す言葉。夫または妻がそれぞれ配偶者を第三者に向かって呼ぶ称としては、家内、内の

人などがある。もとよりこれも一般論。やがてこういう日常の呼称も、昭和という時代に包み込まれてしまうのではなからうか。既に家内などという言い方は余り聞かない。この句では、「連合ひ」という呼び方が、夫婦の堅い絆として互いの中に揺るぎ無い位置を占めている。夏の夜を寛ぐ夫婦。「汝と我」がお互いの確かな信頼を示す。

祝日を愚かに増やし秋暑し

中村嵐楓子

「国民の祝日」が現在何日あるか即答出来る人は余りいないだろう。旧制の天長節や神嘗祭などを廃して新憲法のもとに昭和三年に制定された祝日である。数えると一五日ある。それが昨年までの国民の祝日だった。今年はその日に加えて「山の日」が登場する。八月一日。これらの祝日の中には、第二または第三月曜日と称する祝日が四日もある。成人の日、海の日、敬老の日、体育の日である。加えて今年から参加した「山の日」の登場は、多くの人が訝しんだことだろう。歳時記の発行者は改訂版の準備に入らなくてはならない。「海の日」があれば即ち「山の日」もあるべきだ、という申し入れは当然のこと。反面それでは「大地の日」は必要ないか、という意見もある。暦を見て初めて知ったという人が大半ではなからうか。

「祝日を愚かに増やし」は、そういう意見を総括したも

のと言える。「秋暑し」がそれをしつかりと支えている。今一番ほしい祝日は、「平和の日」である。

雨上がる虹の夕空広島忌

小張 昭一

今年の広島忌は晴天だった。八月六日は正式には、広島平和記念日、八月九日の長崎忌は、ながさき平和の日、と呼ぶと当用日記にある。但し双方とも手持ちの辞書には記載はない。広島では訪れたオバマ大統領が折鶴を呈した。この句、「虹の夕空」が善い。作者は当時中学の上級だろうか。原爆に続く敗戦の衝撃は、尋常一様の思いではなかった。全ての人がそうだった。七一年が過ぎた。「虹の夕空」に、世界の平和への願いが読みとれる。今広島、長崎を訪れる人は、皆さんそう思うだろう。

群るる亀見てゐる処暑の橋の上

栗原 完爾

今年の処暑は八月三三日。立秋を過ぎて二週間余。処暑には暑さが収まるの意味がある。しかし当地のこの日は暑かった。温度計は三二度を指す。

この句を見て、成田の新勝寺本堂下の古池を思い出した。石橋を渡ると左右に池。池畔に立つと亀の姿が見える。創建一〇七〇年の古寺である。「亀は万年」の言葉を思う。作者の訪れたのは他の場所だろう。しかし亀という生物に

は確かに見えて飽きないものがある。その思いは、思慮を越えた無心の境地と言うべきか。作者もおなじだろう。「橋の上」が、その思いを良く収束している。

持ち歩く水の重さや終戦日

小倉 陶女

例えば夏場の吟行を考えると、バッグに潜ませるものにペットボトルは欠かせない。小型のものは忽ち空になる。大ぶりのボトルは重い。まさに「水の重さや」である。俳句を学ぶ私たちにとって、吟行は季節を分かつた大事な修業の場である。実物を観察することは、頭の中だけで持えた一七文字の到底及ぶところではない。この句には作者の精進ふりが感じられる。「終戦日」の意外さも善い。

この地球疲れ初めしか花臭木

府川 昭子

「花臭木」は鑑賞本によると、茎と葉に悪臭があり、古くから染料に使われたとある。また花も実も風情があると記す。然し悪臭があるとは言え、この字はいささか酷だ。

今年の台風は異常だった。地震もまた被害を与えた。地球の温暖化は夙に言われている。作者はそれらを、「この地球疲れ初めしか」と記す。的確な表現だ。しかし事態は進行中。我われもまたその地球の微々たる生物の一つである。困難極まる問題だが、祈るだけでは解決出来ない。